参考1

会　議　録

１　　会　議　名　　第２回北九州市次期教育プラン検討会議

２　　会議種別　　市政運営上の会合

３　　議　　題　　次期「北九州市教育プラン」の構成について（案）

４　　開催日時　　令和６年２月１３日（火）13 時 00 分～14 時３０分

５　　開催場所　　北九州市立男女共同参画センター・ムーブ
（北九州市小倉北区大手町１１番４号）

６　　出　席　者　　構成員８名、教育長、教育次長、事務局

７　　会議経過（発言内容）

（１）開会及び教育長あいさつ

本日は大変ご多忙の中、ご出席いただきまして誠にありがとうございます。

教育委員会を代表いたしまして、ごあいさつを申し上げます。

先月、北九州市の新たなまちづくりの根幹、基本構想となる、新ビジョンの最終案が、武内市長から示されました。

その中の教育分野に特化したような形で、２月６日に総合教育会議が開催され、武内市長から教育委員会に対して、令和６年度から始まる教育大綱の最終案が示されました。

この次期教育大綱は、学校現場の最前線で活躍される教職員の方々、地域の方々、そして何よりもこどもたち自身、その三者が一丸となって、取り組むための道しるべを示したものであります。この教育大綱は、３月末に策定される予定になっております。

武内市長はよく「こどもまんなか社会」とおっしゃられていますが、こどもたちに対して、質の高い教育環境の充実を図っていく中で、こども一人ひとりのウェルビーイングを実現すること、それを社会全体のウェルビーイングの実現につなげていきたいという市長の思いを教育大綱の中に示したいということをおっしゃっていました。

教育委員会として、その教育大綱を受けまして、それに沿った基本的な方向性というものを、実効性のある、一体的な計画として落とし込んでいくのが、今から策定する教育振興基本計画でございます。

この教育プランに関して、アンケート等を実施し、こどもの声、そして保護者の声、教職員の声をしっかりと受けとめ、その原案をブラッシュアップさせたいと考えてお

ります。本日はその原案を、皆様方にお示しさせていただきたいと考えております。
　皆様方の後方に、「礎」という言葉を挙げさせていただいております。これは教育委員会の方で、今年の１文字ということで、選ばせていただいた言葉でございます。
　新しい市長のもとで教育大綱が定められ、そしてその教育大綱に沿い、教育プランを作り上げていくわけでございますが、本市の教育が新しいステージに入ることになります。しっかりとこどもたちの未来を見据えながら、この教育の「礎」を、この一年間で築いて参りたいと考えておりますので、どうぞご協力のほどよろしくお願い申し上げます。

（２）議題　次期「北九州市教育プラン」の構成について（案）

○　眞鍋座長
　今、教育長からもありましたように、次期教育プランというのを練り上げていく、このフェーズに入ってきています。今日の議論が、次期教育プランの「礎」になるかと思いますので、活発なご意見等いただければありがたいと思っております。
　それでは、今日の議題ですが、お手元の資料にもございますように、「次期「北九州市教育プラン」の構成について（案）」というのがあります。これをご説明いただきながら、様々な意見をいただきつつ、ディスカッションしていければと思っております。
　それではまず、全体のスケジュールの確認。それから先日示されました、北九州市の新しいビジョン。それから、北九州市の次期教育大綱。この３点について、まず事務局からご説明いただきながら、議論できればと思っております。お願いします。

栗原企画調整課長より説明（資料１～資料５）

○　宮口構成員
　全体的にたくさんございますが、こどもをまんなかに置いて、というのは非常に賛同するところであります。そして、この１から５の教育大綱の中身に関しても、これが実現すれば、こどもたちにとっても、地域にとっても有益な、北九州市になると思っております。
　ただ、理想をあげるのと実現するのはなかなか難しいところがあるなと思っていて、例えば１番の「居心地のよい学校」というところであがっているのは、「安全安心な」という言葉で前回の会議でも申しましたが、安全というのは、どちらかというと客観的なところで、安心は主観的で、大人が考える安全という言葉が、こどもたちにとって安心に繋がるような形にしていかなければいけない。
　特に環境面に関しては、これは大人が十分配慮して、安全を構築していく必要があると思っておりますが、人に対しても存在していて、例えば、「写真を撮ってもいい？」と聞く一見優しい人がいて、それでトラブルに巻き込まれたり、こういった認識という

のは、どんな人が危ないのかとか安全であるかについての教育的な指導がいると思いますし、そういう観点は、こどもたちにとって、実は安心だと思っていても危険だと。こういったところは、何らかの方策で対応していかなきゃいけないだろうと思っております。

２番目の、失敗を恐れず、挑戦して人間性を高めていく、これも、掲げていくのは非常に大事なことですが、実現するのは難しいだろうと思っています。私はこの３年間、北九州市の教育センターと一緒に共同研究をして参りました。そこでこどもたちに直接、教育センターからアンケートしてもらったことがあり、それを見ますと、データとしては、ある学校の例なんですが、「学校へ行くのが楽しい」とか、「先生は良いところを認めてくれると思う」の回答は、８割、９割のこどもたちが肯定的にとらえているんですが、一方「自分にはよいところがある」と答えたこどもたちは５０％ですね。少し自信がないのかな、ということももいます。その背景にあるのは、「自分がミスをしたりとか、勘違いすることがある」というこどもが６３％、「先生や、おうちの人が話をしようとしたら、聞いている内容がわからなかったりする」これも６３％、「集中力が続かなかったり、失敗したときに、次はどうしたらいいかを考えることが苦手である」というこどもたちが４３％、「言葉だけの説明だとわかりにくいことがある」、これが４０％くらいでございます。あとは「自分にとってどのような学び方があっているかわからない」というこどもは４５％、「失敗をしたときなどに、そうならないために次はどうしたらよいかを考えることが苦手である」これは３５％です。

つまり、３割から４割のこどもたちについては、自分で考えなさいと言われても、戸惑っているという実態がすごくあるらしいということが、このアンケート結果でした。

私はこれがすごく気になっていまして、そういった面が、考える力、認知的な力も関係すると思いますが、どのこどもも同じベースに乗せて、こどもまんなかでいくためには、どんな状況にあるこどもたちにとっても、そこに持ち帰ってあげるベースが必要じゃないかと思っています。それが結局はコミュニケーションの土台になっていって、そのコミュニケーションが地域との繋がりや個の繋がりに繋がっていき、それぞれ繋がっていくのではないだろうかと、私はそのように思いますので、こどもたちそれぞれが力を発揮できるような、それぞれの環境を作っていってあげる。そのためには、ベースとなってくる考える力や挑戦する力、そういった基礎的なところを、ぜひ育てていただけるような準備をしていただきたいなというふうに思っております。以上です。

○　友納構成員

宮口構成員がおっしゃったアンケートの結果をお聞きして、こどもたちはこんなにもセルフモニターがあるんだと感動しました。

外来にいらっしゃる方は、セルフモニターが弱い方が多いので、「集中が苦手」４３％と聞くと、自分のことがこんなにも見えているんだ、というところがとてもいいことで、それを答えられるっていうことは、セルフモニターが機能しているということで、

学校の先生はまずそこを評価していただきたいと思いました。私も外来で、自分のことをこうやって感じてるんだね、すごいね、と言います。そういうところも認識して、学校の先生に、こどもたちに伝えていただきたいなと思いました。

〇上田構成員

私は、下岡さんと同じく企業をやってきていて、この５つのテーマについては非常によくまとめていただいていると思っています。ただ、企業の方もがらっと変わっていて、今のやり方じゃ生きていけないという、非常に差し迫ったところがあり、パラダイムシフトにどう対応していくかということを考える場合において、やっぱり既存の価値観を壊していくことから始まると思っています。既存の価値観を壊すというのは、基本的に、今の組織を壊すということですよね。一番考えないといけないのは、北九州市の教育機構そのものをどうするのか。戦後から、こういう形で教育が行われてきた中で、もちろんいいところもあるし、悪いところもあると思いますが、今の企業から見ると、非常にこどもたちの弱さが目立つ。これを言うのは企業人として共通じゃないかと思うんです。それを違う形で、市長が言われているような１歩先の価値観を体現するような、２０４０年の頃にそういう人たちが育つには、まずこの教育機構そのものを大胆に変えていくことが必要じゃないかと私は思っています。この文章の中から、なかなかそれが読み取れないので、もちろんそういうことを考えた上でこうなっているのではないかと推測ができるんですけども、そういうところが少し迫力として欠けているというよりも、もったいないという感覚があります。

今は、年功序列がいいということは、全く思っていないです。組織として、若い人がどんどん、スタートアップ企業のように育てていかないといけないです。じゃあ学校の現場ではどうなのかということです。今の価値観を崩すようなことが、もし北九州市で出来れば、他の地域と違った教育が実現できるんじゃないかと思っています。

〇教育長

上田構成員のおっしゃること、十分わかりますが、なかなかその言葉として文章化するのが難しいこともありますが、少なくとも、２０４０年に向かって、今の教育のあり方では先が見えないということを、盛り込んでいきたいという気持ちはございます。

今の教育制度を壊すというのは、文部科学省の枠の中でやっている公教育という制約があるため、難しいところもあることはご理解いただきたいと思います。

〇泉構成員

冒頭、皆さまのご意見から、こどもの力を育てるサポート体制の充実が引き続き大事と思いました。次期教育プランの構成に示される、複数の専門人材が、先生をサポートする立場から、どういう役割分担をするのかについてご検討いただけると幸いです。

引き続き核となる専門人材に加えて、新たな人材を巻き込むことも大事と思いまし

た。

〇友納構成員
　上田さんのおっしゃった価値観を壊すという話ですが、先月、不登校等支援センターの所長から、戦後からの学校の歴史をお聞きしました。その話では、依然と現在の学校教育の価値観がすでに全然違うので、私は逆に、価値観がすごく変わったと思いました。多分、これからも変わっていくと思いました。

〇眞鍋座長
　それでは次に、次の北九州市の教育プランの方向性と、アンケートを実施する予定とのことなので、これについて、事務局からご説明いただきたいと思います。

栗原企画調整課長より説明（資料６～資料１０）

〇眞鍋座長
　今のご説明にもありましたが、この資料８に、次期教育大綱の最終案で掲げた５つの柱に沿って、次期教育プランで取り組む施策をまとめていただいております。
　これを議論のたたき台として、今後、北九州市の教育で力を入れるべき施策などを中心に、皆様のご意見をいただきたいなと思っております。
　もちろんこの資料 8 以外でも、アンケートとかでも構いませんので、忌憚ないご意見をいただければと思います。時間も少し余裕がありますので、じっくりお話できたらと思っております。

〇上田構成員
　よくまとまっている資料だと思います。考え方はよくわかるんですが、先ほどから申していますが、どうしても私どもは、企業という視点、目線での見方になるので、この地域という中に、もちろんＰＴＡとか保護者も入るでしょうけど、当然ここに北九州にある企業は入ってくるのではないかと思います。企業がこの地域に求めているこどもというものを、どういうふうに考え、育てていったらいいかというような視点も入ってもいいのではと感じました。

〇栗原課長
　ミッションの⑤の地域とのつながりの中で、一緒に教育に取り込むステークホルダーとして地域・企業と掲げているところで、企業がどのような人材を求めるのか、どういう視点でそれを教育の中に取り組んでいけばいいのかというところは、文章化する中で、どのような文言を盛り込めば適切な表現になるのかを、検討しながら進めて参りたいと思います。またご意見いただければと思います。

〇教育長

先ほどの上田構成員からのご質問にも合わせて、もう一度説明させていただきたいのですが、実は、よく一般市民の方から、学校が変わらないといけないと言われることが最近すごく増えております。実際、数十年前に、自分自身が学校生活を行った一般市民の方の感覚と、今、学校に求められている市民のニーズは、非常に拡大されております。いわゆる学校教育だけではなく、福祉の観点、社会教育の観点、様々な面が、学校という場を元にして、教育に関わってくるという意味です。

今回示している教育プランのたたき台で、５つのミッションを挙げていますが、今から十数年前に計画を示したときには、こどもたちをこう育てます、こどもたちにこういう学力をつけますとか、どういう部活動をやって、生徒指導をしっかりやりますとか、こどもを教育の対象として計画を作ってきていたのですが、今回の５つの柱はどれも、こどもたちが２０４０年にどうなるだろうかということを想定して、こどもを中心に作ってきております。

上田構成員からご質問のあった、地域という面でいくと、例えば５番目で、あくまでもこどもたちが、地域、社会に出たときに、今は就職と言いますが、おそらく職業というもの自体が、今の時代とは変わってくるので、企業に就職というよりは、企業を起こす人材にきっと育っていくだろうなと考え、そういうこどもたちが何を求めて、こういう人材が育っていくだろうということを見越した上で、プランのたたき台を作っておりますので、上田構成員のお気持ちというのは、かなり組み込んでいるのではないかと思います。

〇鶴見構成員

今の話にあった、企業がどう教育現場に関わってくるかという話が、私の意見にも関係してきますのでご説明させていただきたいと思います。

ＳＴＥＡＭ教育については、事務局に追加意見として出したところですが、実はこのＳＴＥＡＭ教育という言葉は、狭い理解のされ方をされることが多いです。

つまりＳＴＥＡＭの頭文字は、サイエンスとかテクノロジーとかの理工系の教育分野に限った教育を進めることに捉えられがちですが、実はそうではなく、文系とか理系の枠を離れて、その問題解決を創造的に話して現場を作るっていうのがＳＴＥＡＭ教育の基本です。

前回、私がロボコンという舞台を元に、チャレンジをして失敗してもいいんだと、そういう事例を作って、それがＳＴＥＡＭ教育の中に組み込まれて、こどもたちがのびのびと、自分たちの考えでやっていくということができるようにする。これが私の意見の骨子です。その中で、どういう力を付ければいいかということで言うと、自ら問いを立て解決する「デザイン思考力」と、それから行動して解決する「共創力」で、この力は、私も含めてですが、自分たちが教育を受けたときにはなかったものな

んです。要するに、知識や勉学とか、いかに早く問題を解くとか、今の大人たちはほとんどがそういう教育を受けてきています。

ところが、要するに答えのないことが、たくさん世の中にはあるわけです。解答がないものに対して、どう自分で考えて対応して、という力が問われていると思います。

今のこどもたちは実は、こどもたちだけで、問題や課題があったときに、好きな友達とワイワイガヤガヤやりながら解決方法を見つけていきます。どうしても大人、あるいは教師は教え込みたくなる。知識を与えたい、そうじゃないよ、こっちに考えたらいいよ、と道筋をつい答えてしまう。そういう道筋を与えるとか知識を与えるっていう教育から、こどもたちが自分たちで見つけてくっていう取り組みにシフトしなきゃいけない。これがＳＴＥＡＭ教育の基本と、私は思っています。

参考例として、北九州高専では昔から出前授業をやっているんですが、最近取り組んでいるＳＴＥＡＭ教育を紹介すると、河内小学校に本校の学生が行き、小学校同士がオンラインで自分の学校を紹介するという授業の教材づくりをやるんですけど、先生方はそのスライド作りや発表方法などが全然わからない。そこにうちの学生が行って、マンツーマンでこどもたちと一緒に教材作りをして、発表の練習も一緒にやったりする。そうしたら、そのこどもたちがみんな生き生きとして、自分の学校の紹介をしていて、帰るときにはとにかく離れるのが惜しいような感じで、またすぐ来てねというような感じの反応があったということです。

同じように中学校の技術科で、プログラミングの授業に、本校の学生あるいは先生が一緒に手伝ったりしてます。

実はここに、先ほどご質問があった企業がどう関わるかが入ってきます。

つまり、学校の現場に、先生だけではなくて、他の高等教育機関、企業の方あるいは地域の方が入って、ここの地域ではどういう課題があるんだろうということを、こどもたちに話をして、教えるんじゃなくて、こどもたちに考えてもらう。その中で、こどもたちが、新しいアイデアを作って実行に移していくという話です。

実は、これはロボコンなんかと一緒なんですね。目の前にある課題をみんなで共創して、課題を解決する。こういう力を身につけて欲しいと、私は思っております。

先日、九州工学教育協会があり、そのシンポジウムに出席しました。大学の先生方のシンポジウムですから、堅い話ばかりかと思ったら、今回は熊本農業高校の生徒の発表会がありました。どういうものかというと、肉を食肉に処理したときに、たくさんの廃棄物が出る。脂身とか何とかをみんな捨てているらしい。畜産科のこどもたちが、それを使ってなにかできないかと考えて、道の駅とかで物を売っている方たちと話をした時に、石鹸を作ってみたらどうかっていうアイデアが出たそうです。

その石鹸を作るというアイデアから、こどもたちが石鹸を実際に作って、商品化というところまでいくんですけれど、そのプロセスが非常に面白かったんです。

成功するまでに数年かかっているんですが、その間の彼らの試行錯誤がまさしくＳ

ＴＥＡＭ教育なんです。
　目の前にあるいろんな課題を、大人、地域の人、学生、そういう人たちみんなと教育現場に入って、小学生のころから一緒にやっていくというところに、非常に新しい教育なのかなと思います。

〇眞鍋座長
　先生方のこどもたちへの関わり方や、教育をどうデザインするかという大きな視点からすると、現場の先生方には今までと違う能力が求められるのかなと思ったのですが、ぜひこの点、髙橋次長にお聞きしたいです。現場の先生方の教え方とか、これまでとの違いだとか、そういったことに先生が戸惑ったりとか、どうなんでしょう。

〇髙橋教育次長
　こどもたちの学ぶ環境や学びの様子、あるいは社会から求められる力、そういうものが大きく変わってきているというのは、これまでも実感していたところです。
　既存の学校の教育システムに、やはりもう限界がきてるんじゃないか、というご意見もあって、我々学校出身者には非常に耳の痛い話ではありますが、やはりそこは真摯に受けとめなくてはいけない。教員たちも意識改革、アップデートしていかないといけないと思っているところです。
　特に、我々教師の役目は、今までの教えるということから、学びをサポートする、という世界にシフトしていかなければいけなくて、昔から言われていたんですけど、どうしても、教えていかなきゃいけないという義務感によって、学校教育が作り上げられていた。今回、１人１台タブレットもあり、こどもたちが自分から学べる力をサポートしていくことがより求められるようになり、それが可能な環境が近づきつつあるので、教師の意識改革も、どんどん進んでいなければならないんです。今は、その過渡期にあります。コロナ以後は、それが劇的に進んできて、過去１０年ぐらいのスパンで進んでいた変化が、もう１～２年でやってくるというところで、先生も戸惑いつつ、教育のあり方を考え直しているところでございます。このプランも、そういうことをベースに考えていただければありがたいと思います。

〇眞鍋座長
　大きく変化をしているし、変化しないといけないということかと思いました。

〇上田構成員
　私の言いたかったことを、鶴見先生が言ってくれました。
　学校に出かけることがあり、学校の先生と話すことがありました。その中で、今、鶴見構成員が言ったような、先生１人だけでは問題解決できないということ、世の中はものすごく高度になっているわけで、そこに専門知識を持った方が入って、サポートして

あげる。校長先生を中心にした現場の中に、そういった機構を盛り込んでいくという組織改革が必要だと思います。私が機構を変えたらどうかというのは、そういうことで、校長先生も３年ごとに変わるのではなく、今は企業でも長期政権をやっていますから、長いスパンで校長先生を頭にして、特徴のある学校を作っていくと、北九州の教育制度が、他の自治体に比べて目立つようになるのではないかと思います。

〇眞鍋座長

社会全体で学校を育てていく。こどもたちを社会で育てていくという、そういうことですかね。

〇窪田構成員

今までの先生方のお話に触発されたところもありますし、以前から考えていたことでもありますが、先ほどの鶴見先生のお話のような取組みは、いろいろなところで、その地域やそこに関連した企業、大学とかの工夫でなされていると思いますが、そういうことをできるだけ広く保証するということからいくと、上田構成員がおっしゃったように、仕組みとして、例えば非常に熱心な先生と、地域のすぐれた企業があったら成り立つことではなく、それをコーディネートする人材というのが、配置されている必要があると思います。地域との連携ということは、どんな領域でも言われ続けていることですが、それを専門的に担える専門性と時間、配置をされる人がいないと、学校で言えば、特定の先生に非常に負担がかかってしまうということが起きていると思います。

そういう意味で、お金がかかることではありますが、学校で例えば３０人学級にするだけでもすごく違っていて、そういう規模的なところの改革もそうですし、地域とのコーディネートを担う専門人材を必ず配置するとかも、組織改革ということになると思います。それから、私はスクールカウンセラーとして、現場に少しだけ出向いていますが、スクールカウンセラーなどを活用する意思は、北九州市は非常に持っているんですが、実は残念ながら、全国６７政令市・都道府県教育委員会の中で、５７番目の配置時間の少なさなんです。週当たり４時間行けるか行けないかという時間だと、なかなか先生方との協働も難しいです。

今回のプラン、網羅的によくできていると思うのですが、仕組みや人材を配置していただかないと、教職員のウェルビーイングというところがとても気になります。

小学校６年間、中学校３年間の間に、社会で通用する人間に育てなければいけないという、すごいミッションを背負って先生方がやってらっしゃる。そこで、多様なこどもや保護者とのミスマッチみたいなことが起きていて、こういうことを解消して、教職員のウェルビーイングを高めるということからいっても、例えば、学級のこどもの人数が減るとか、いろんな人材が入るとか、財政的なことが絡むので難しいことは百も承知ですけど、そういうことが入らないと、絵に描いた餅になるということを感じています。

〇泉構成員

　これまでのお話を伺って、地域と学校の橋渡し役という専門人材が、今後どういう役割分担をするのか改めて大事と思います。鶴見先生のお話から、ネガティブケイパビリティという考え方がありますが、教えるだけではなく、相手が答えを考え抜くまで待つという関わり方も、地域連携による教育を進めていく際、大事なキーワードと思いました。

　また、鶴見先生の事例を伺い、目標３－６及び目標５－１に横串をさすことで、北九州市ならではの見せ方ができそうと思いました。ＳＴＥＡＭ教育の地域連携という打ち出し方は、とても面白そうです。

　私が所属する理系大学の取り組みを、２点だけ少しご紹介させていただきますと、１点目が宇宙人材教育ということで、学内に超小型衛星の試験センターという現場を有するということを強みとして、昨年１１月から、宇宙及び衛星開発をテーマにしたアントレプレナー教育が始まったばかりです。

　２点目のロボット人材教育においては、ＲａａＳ（ロボット・アズ・ア・サービス）という、ロボットを開発するだけではなく、ロボットを利活用できる人材育成の取組みが、令和３年４月から始まってます。

　生成ＡＩとのつき合い方で必要な、問い立て力を育てることは、技術力だけでなく、創造力を育成する高等教育の現場にとっても大事なキーワードと思います。地域連携の更なる強化により、このような視点がこどものときから育まれる教育プランになると、とても有り難く思います。

〇眞鍋座長

　私も個人的に思ったことが、私も十数年、大学生と対峙していますが、最近多く感じるのが、「先生どうしたらいいですか」と聞いてくる。昔の方が少なかったと思うし、「それを考えるのが勉強じゃない？」と思いますが、難しいところもあります。ここが変わるといいんじゃないかと思いました。

　地域、企業との連携教育について話が出ていますが、下岡構成員、いかがでしょうか。企業の立場から、ぜひお話いただきたいと思います。

〇下岡構成員

　私はＩＴとかスタートアップにいるので、おそらく一番世の中の変化を最先端で感じています。例えば、プログラミング教育が話題になり、すぐに生成ＡＩが出て、プログラミングを書かなくていい世界になり、毎日、自分の会社の便利ツールを作っていますが、コードは１行も書いてないんです。生成ＡＩに投げて、こういうことしたいんだと返ってきたものと、エラーを上げながら作ってしまうんで、未来だと思っていたことが実現している。そのくらい変化が激しいと思います。

　一方で、話を変えると、今日の資料を見て思ったのは、先生たちはやる事が多い、何

でもやらなきゃいけないと感じました。今でも小学校の先生は、ピアノが引けないといけないんですか。

〇髙橋教育次長
　高学年については、教科担任制にシフトしているところがございますが、一応、卒業単位には入っています。

〇下岡構成員
　小学校の先生はピアノもできて、裁縫もできて、プログラミングもできて、AI も使えるようにならないといけないとなると、とても大変だと思いました。しかし、なぜ、やることが多くなっているのに、「いまの教育は時代に追いついていない」と言われるのでしょうか。それを考えるうえで、私たち IT の世界が参考になると思いました。
　私たちはスマートフォンのアプリケーションを作っていますが、一つ一つのアプリケーションの寿命はどんどん短くなっているように感じます。昔は数年だったものが、今では大体 1 年、またはそれ以下のものも多くあるのではないかと思います。これは、技術が常に進化し、世の中が変化しているため、必要とされるものがどんどん変わっていき、アプリケーションの寿命が短くなっているからだと思っています。
　しかし、アプリケーションが頻繁に更新され、生まれては消えていく一方で、それらを支える OS（オペレーティングシステム）は、定期的なバージョンアップを通じてじっくりと進化しています。
　教育におけるプログラミングや裁縫という知識はアプリケーションに関する話で、これは明日いらなくなることもあれば、時代の変化によって変わるスピードも速いです。また、人によってスマートフォンに入れるアプリケーションが異なるように、人によって必要な知識も異なり、多様性があります。変化のスピードも速く、人によって異なるすべての知識を、ひとりの先生が教えるのはとても難しいと思います。先生たちができることは、その下の OS を育てることであり、人間としての基礎・基盤を育てることだと理解しました。
　アプリケーションの動作スピードやスペックは OS に依存します。OS のパフォーマンスがアプリケーションのパフォーマンスを決定します。目に見えないため軽視されがちですが、OS は非常に重要です。いわば人間の基礎学力というのはこの OS のようなもので、教育によってそこを改善するのは理にかなっています。
　もうひとつ、アプリケーションではなく、教育が OS に注力するべきだと感じる理由があります。経済産業省は来年や再来年の世の中を見据え、施策を作って実行することができます。スピードが重要です。しかし、教育プランをつくる文部科学省はそのような短期的な視点では施策を打てません。なぜなら、教育の効果が現れるのは子ども達が大人になる数十年という年月がかかるからです。プログラミングという知識を強化しても、数十年後には不要な知識になっている可能性があります。結果的に、長期間変

わらない基礎・基盤にしかアプローチできないと思いました。
　これを踏まえると、教育で議論できるのは、長く変わらない本質的なものをどう育てていくかだけです。公教育ができるのはその範囲内だと思いますので、学校教育は OS を教え、アプリケーションは自分たちで学ぶようにしてはどうでしょうか。AI やアプリを使った学習も良いでしょう。
　しかし、そうなると、もう一つ疑問が生じます。この OS がどこまで公教育のみで育つものなのか。OS の育成には家庭教育の側面もあると思います。家庭教育と公教育はどのように区別されるのでしょうか。学校現場のことはわかりませんが、家庭で取り組むべき問題も多くあるのではないかと思います。教育が変わる必要があるのは、技術の進化や社会の進化に合わせるためだけでなく、親の役割が変化する必要があるからかもしれません。具体的な意見があれば、聞いてみたいと思います。

〇教育長
　下岡構成員、確か前回も公教育なのかどうかという話、確かご質問されたと思います。おそらくそれの続きだと思いますが、そこの部分は、プランの話ではなく、私たちが現場でこどもたちを教育する上での、いつも常に抱いてる疑問点ではあります。
　例えば今、教育委員会の大きな施策の１つに、こどもの健口力アップといってむし歯をなくそうという運動をしているんです。学校で、給食の後にフッ化物の入った薬剤で口をゆすぎましょうという運動をしていますが、最初に学校にその話をしたときに、先生方は、それは家庭教育の話だろうと。本来は家で、ひとつの習慣として、食事をしたら歯を磨くということをきちんとしていれば、何もむし歯指導まで学校でする必要はないですが、それが、公教育なのか家庭教育なのかという仕分けの中で、こどもたちが人生１００年時代を迎えるにあたって、家庭だけにはその責任を押し付けられないということで、ここはもう学校教育でやろうとなりました。今の下岡構成員のご質問というのは、これからもずっと考えていく話かなと思います。
　資料７に、「不易流行」という言葉を入れています。これは、教育界でよく言われる言葉ですが、やっぱり根本として、アプリケーションというより、ベースとしてこどもたちに教えたいのは、ハウツーの世界ではなくて深い人間性、知識も教養をすべて含めて深い人間性を身につけて欲しい。それが教育の根幹だと。それはつまるところ、学校教育であろうと、家庭教育であろうと、本来は一緒なんでしょうけれども、なかなか仕分けが難しいところもあります。
　あとは、具体的なことについては、事務局からお話しします。

〇栗原課長
　まず、ＯＳという部分については、我々もそうだと思っています。今回の教育プランについて、ポンチ絵を１枚作っていますが、その中で、この先の不透明な時代の中で未来を生きる力、というのが重要で、自分なりの価値観・哲学をしっかり持った人間にな

れるように、学校として育てていきたいという考えをお示ししているところです。
　あと、役割分担が、学校教育なのか家庭なのかというお話がございましたが、学校が何でもするのか、あるいは家庭が本来やるべきではないのかは、物によって色合いが変わると思います。アンケートを今回やりますが、保護者向けのアンケートの中で、資料１０－３の６ページ、１１番に、１ページにわたって項目を並べており、これは、学校なのか、家庭なのか、それともその他の場所なのか、保護者の皆さんはどうお考えですかというのを、広く意見を伺って、学校は何をしていったらいいのかを考えるきっかけになればという意図で、この質問を入れています。

〇下岡構成員
　私が皆さんの話を聞いて整理したのが、時代の変化によっても変わりやすく、人によって多様性があるアプリケーションの部分である学力というのは、特にアクションが遅くなってしまう教育の中で賄うのは結構難しいとなったとき、その下にあるＯＳを育てるということになればなるほど、公教育ではなく家庭というとこに近づくのではないかと思いました。その議論になればなるほど、おそらく学校ができることが限られてくるときに、そこだけやるというのも、保護者に言いにくい部分だとかもあるのかなと思ったりしました。
　もう１つだけ知りたいことが、この安全とか居心地がいいとかを強調されていますが、これは、昔に比べると安全ではなくなっている、居心地が悪くなっているということなのでしょうか。この辺の変化と、どういう時代背景の中で、どういうことが起きていて、なぜ今、安全、安心、居心地みたいなことが再度フォーカスをされているのか、実際の現場のお話を聞かせていただけるとありがたいです。

〇髙橋教育次長
　昔の学校が安全で、今の学校が安全じゃないというわけではないと思いますが、こどもたちの声をもっと拾おうという姿勢の中で、その感度が高くなっていることは確かだと思います。
　多様性に対する対応についても、もっと配慮がいるということがすごく求められてきている学校になっていると思います。
　逆に言えば、昔は全体主義みたいなところも多かったし、昔の部活動のあり方なんか考えても、我々が中学生のころは、水飲んじゃいけないとか、１日練習休んだら３日遅れるとか、そういう変なプレッシャーの中でやっていましたが、それがおかしいということがわかってきて、こどもたちにとって、より居心地のいい場所、本当にこどもの声が反映された場所に学校が変わるべきだという議論の中で、こういうところは強調されてきているのだと思います。

〇眞鍋座長

こどもの変化の話が出ましたが、友納構成員はいかがでしょうか。こどもを見ていて、最近の安全安心に対するニーズは高まっているでしょうか。

〇友納構成員

居場所を模索してくださる先生方が増えたと思います。不登校のこどもはオンラインで出席扱いにしていただけて、私の受け持ちの方々が本当に助かっています。かなり多様性に対応しようという意気込みが、学校現場の方々からも感じ取れるので、感謝しています。

先ほどの家庭教育なのかという話について、お母さんたちの話もよく聞きますが、お母さんたちも忙しすぎて余裕がないです。働いているお母さんたちは、家庭教育はいつできるだろうか、そんな暇はありませんと言われることがあります。そういう家庭にとっては、学校でしていただけると助かると思いました。

健やかな体とありますが、ＯＳの観点から言えば体が大事です。私たちドクターは、不登校のこどもには、まず健康を守りなさい、あなたの健康を守りなさいと必ず言います。昼夜逆転したこどもには、昼間遊びに行きなさい、近くの公園でこどもが遊んでいた感じで遊んでね、体を守ってねと言うんです。この前来た方は、ベッドでスマホを触ると眩しくて、近くのお母さんが眠れないから、ベッドの下の壁との隙間のところでするから手足が痛いとか言うので、それはエコノミー症候群になるからいけない、と言ったらやめるんです。ビタミンＤの話とか骨の話とか視力の話とか、そういうことを言うと、こどもは自分で体を守ろうという気になる。そこをどうやって伝えればいいのか。体があって、心があって、仕事なんです。

北九州市って、体力があります。全国よりいいじゃないですか。ここはアピールポイントかと思います。健康と体力も強みになると思うので、私たち小児科医に何ができるのか、考えたいと思います。

〇眞鍋座長

ＯＳの観点からしても、健康第一ということですね。それが安全安心の場所に繋がっていくということだと思いました。

〇宮口構成員

私も大学病院等でこどもたちを見ていますが、不器用なこどもが増えたと感じます。学校を回っていると、こんなことで骨折するのかという骨折が増えているとお聞きして、私たちはリハビリテーションの学生を養成していますが、患者さんを想定して実習するときに、正しい身体の構造を無視して、無理やり動かしたりとか、そういう大学生も増えています。自分の体を使うのも苦手だし、人の体の動き方を理解するのも苦手だし、そういった問題というのも最近増えていて、事故が多かったりとか、骨折したりとか、コロナの影響もあるかもしれませんけど、そういうところもすごく危惧していたり

というのが今の傾向じゃないかと思います。

〇鶴見構成員

安心安全の話は、私も現場にいて最近感じるのは、こどもたちがこども同士で非常に気を遣っている。一方で、全然気を遣わないこどももいて、それがトラブルの元になるケースが結構あります。特に気を遣う子というのは、友達との距離感が掴めず、自分の言ったことに対して相手からガツンと言い返されると、へこんで全然教室に入れなくなってしまうことがありました。

昔であれば、こどもの逃げ場は保健室とかでした。北九州市のスクールカウンセラーの配置の状況というのは、全国で見ても潤沢ではない。幸いに高専では、非常勤のカウンセラーの方が、基本的に毎日入れるように手当てをしております。

それから、本校の場合、スクールカウンセラーが１週間のうち必ず５日、３人で交代ですが、必ずいます。それから、スクールソーシャルワーカーもいます。ある程度潤沢に入れている方かと思いますが、それでも手一杯で、いつも予約が満杯になっています。

実は、こどもたちだけではなく、保護者のカウンセリングを合わせてやっていて、これでも足りないというような状況なんですが、こどもたちのそういう日頃の行動とか、メンタル的なところも含めて、一番よく見ているのは担任の先生なんですよね。担任の先生は担任業務だけでも結構大変ですし、課外活動のいろんな指導などで時間が拘束されて、ましてや小・中学校の先生は、教材作って、それをまた採点したり、コメント書いて返したり、おそらく目いっぱいの時間を使いながら、もしくは家に持ち帰っているかもしれませんね。これは高専でも似ている状況で、本当にそういう状況です。

高専には、学習障害等の障害を持つこどもたちもいて、その子たちへの対応というだけでも、担任業務がもう満杯を越えています。一方で、実はそういうこどもたちは、数学的能力とかプログラミングの力とか、すごく能力が高いです。時間をかけて育ててあげなくちゃいけないということで、ジレンマを感じることがあります。

ですから、先ほどの教職員に対するウェルビーイングとかも、すべてをその 1 人の担任が担当するんじゃなくて、交代しながらやる。例えばここの部分はこの先生がやって、この部分はこの先生がやるというように役割分担して、それの予算的措置を、市の方である程度保証していただければ、現場は相当楽になる部分があるんじゃないかなと私は思います。

〇窪田構成員

先ほどの家庭教育か、学校教育かについて、これはすごく大事なところなので、私なり考えていることですが、学校教育の話で、最初に教育長がおっしゃった、学校を拠点として、様々な人が学校に入ってきて一緒に教育をしていくという、そういうところも含めて学校教育を考えるというように切り分けられないし、保護者を支えないとこど

ものウェルビーイングは成り立たないです。私は短い時間ですがカウンセラーとして入ったときには保護者の方にお会いして、友納構成員がおっしゃったことも含めて保護者にご理解いただくというのもすごく大きいです。

学校教育だけど、学校を拠点にして、様々な企業も地域も入って、保護者ともども支援しながら、こどもを真ん中に置いていくということなのかなと理解しました。

〇眞鍋座長

地域に開かれた学校というのは、随分前から言われていますが、なかなか実質的にそうなっていないというか、もっと地域の中にリソースがたくさんあるわけで、それをもっと有効に活用して、みんなでこどもを育てていくという状態ができると理想的ですよね。

ありがとうございました。活発なご意見、ご議論いただき、いろんな意見が出ました。ぜひいいプランができるんじゃないかなと思います。

８　問い合わせ先　　教育委員会総務部企画調整課
電話番号　０９３－５８２－２３５７